中国報告

<5>

永久不変考えられず
次官級会談に注目したい

中嶋　嶺雄
（東京外語大教授）

今日の中国は、内政的には「四つの現代化」という国家目標をもつと同時に、対外的には、反「覇権」＝対ソ抗争という世界戦略を明白に堅持している。ひるがえって、わが国には、そのように明確な国家目標も世界戦略も存在しないのであり、ここにも日中両国間の非対称性があることを忘れてはなるまい。

中ソ対立や中越戦争に直面している中国がソ連とベトナムの大小の「覇権主義」反対を呼号していることについては、周知のことであるが、私たちの訪中団も中国側からしばしば「覇権主義」反対についての強い意向を聞かされた。そのなかで、もっとも印象的だったのは、中国側の通訳の能力が低くて肝腎の部分を訳しおおせなかったけれども、西安郊外の王莽人民公社（西安京都友好人民公社）で公社の幹部が挨拶の最後に、「〝覇権主義〟に反対して貴国の北方領土返還闘争に立ちあがっている日本人民の皆様に連帯の挨拶を送ります」と語ったことであった。わが国の北方領土返還要求を「覇権主義」反対闘争の一環として位置づけようとする中国側の姿勢は、わが国の国民感情と必ずしも一致しないばかりか、かえってソ連を刺激し、マイナス効果の方が大きいともいえようが、この点を中国側は顧慮したりはしない。それほどまでに「覇権主義」反対への中国の立場は一貫しているといえようが、ここではさしあたり、次の二つの問題に言及してみよう。

「覇権主義」反対

その一つは、今春の中越戦争以来、ベトナムの「小覇権主義」を対外的にはあれほど非難しているのに、中国国内では、ベトナム非難のスローガンがほとんど見受けられず、従って、中国内部に一歩足を踏み入れると、中越戦争がまったく影をひそめてしまうことである。

今日、「四つの現代化」や「三中全会精神」のスローガンがあふれている中国で、今回の旅行中、ベトナム非難のスローガンや中越戦争にかんするニュース写真を目撃したのは、西安郊外の観光地・華清池（楊貴妃の風呂や西安事変の発生地として知られる）の掲示板においてのみであった。この事実は、壁新聞の主張からもうかがえるように、一般民衆のあいだには中越戦争についてやはり戸惑いが潜在している状況の反映のように思われる。

そして中越戦争はあくまでも、中国の対外的威信を基軸にして生じた対外的・国際的な意味あいの強い戦争であり、同時に中国はこの戦争を通じて人民解放軍の抗戦力、アメリカの出方、ソ連の出方などをテストしようとした戦争であったことを物語っていよう。

二つは、こうした中国当局の外に向けての激しい「覇権主義」反対の姿勢にもかかわらず、中国の一般民衆が必ずしもそれほどまでに「覇権主義」にこだわってはいないように思われることである。中国民衆は、政治の世界は所詮、国内政治も国際政治も「覇権」＝ヘゲモニーをめぐる激しい争奪戦にほかならないことを、これまで、あまりにも十分すぎるほど知らされてきている。私が今回の訪中でもっとも衝撃を受けた場面は、北京の北海公園を一人で散歩していたときに出会った人民解放軍の男女の兵士のアベックとの会話であったが、雨宿りしながらロシア民謡のテープ・レコーダーをかけていた彼らに、「こんな曲を聞いてもいいのか」と問うと、彼らは「音楽には国境がない」といい、「ロシア民謡は大好きだ」と答えたのである。

こうした社会的状況を背景にして、来るべき八〇年代には、極限的に悪化した今日の中ソ関係に注目すべき変化が生ずべき条件も成熟しつつあることを見逃してはならない。

中国では最近、失脚した古参幹部・張聞天の名誉回復と追悼の儀式が盛大におこなわれたが、張聞天は、一九三〇年代以来の「モスクワ派」でもあり、中ソ友好時代のソ連大使としてソ連との関係がきわめて深かった人物である。

この九月中旬以降に予定されている中ソ次官級会談がやがてどのような発展を見せるのか、大いに注目されるところでもある。

「覇権主義」反対は、当面、ソ連を対象にするものであるとはいえ、こうした立場を永久不変のものであると考えるわけにもゆかないように思われる。